

穂高の景観に似合う家を提案したい。 Iターンした建築家が建てた 木の香りに包まれた民家スタイルの家

雄大な北アルプスの中で形が富士山に似ていることから「信濃富士」と呼ばれ、昔から安曇野の人たちに愛されてきた有明山。その有明山を目の前に望み、日本の原風景がまだ残る穂高の大地に高松邸はある。そよぐ田んぼの緑と空の青さに映える、白い漆喰壁と黒塗りの板塀のコントラストが美しい外観。どこか懐かしく小粋な新しさも兼ね

備えた民家建築は、これぞ安曇野の家と思うほど、辺りの景色に調和し静かに個性を主張していた。
和歌山県出身の高松伸幸さんが穂高に家を建てようと思ったのは、縁あって安曇野で仕事をすることになったからだ。大阪でログハウスを中心とする建築の仕事しながら独立を考えていた時に、安曇野で仕事を

しないかと声がかかった。もともとログハウス造りで安曇野は担当エリアであり、子供のころから家族旅行で何度も訪れてスキーや登山で慣れ親しんでいた長野県、Iターンすることに抵抗はなかったという。「事務所を開設してログハウス造りの仕事を始めていて、うちの、この安曇野・穂高エリアというのは、私の理想とする生活ができる地域だと

思いました。田舎の良さとも都市の利便性の両方を兼ね備えていてなんとも住み心地の良い場所、まさにツボにはまったという感じですね。そんな折に眺望の開けたこの分譲地に出会い、まずは土地を購入していつかは家を建てようと思っていました」と高松さん。

ログハウスを得意とする高松さんは自分も家を建てるなら当然ログハウスを建てると思っていた。しかし、いざ家づくりとなると、この穂高がたなびく田園地帯に外材を使ったログハウスが果たして似合うのか？ 県産材を使った日本の風土に合った伝統的工法の方がふさわしいのではないかと考えるようになったという。「ログにはログの良さがある。でも似合うのは森の中。「建物の中は個人のもの、外はみんなのもの」。個性と地域性との調和がとれた家造り、外観は地域の景観の一部でもあるはず。その結果、自分の中でこういう建築が日本人の標準的なスタイルではないかと思ったのです。この家は実験ハウス。こんな家はどうかという提案できる家にしたかった」と高松さんは話す。

実際に玄関の前に立つとどこかの旅館にきたようなほっとしたこむ風情がある。一歩室



引込み戸のおかげで抜群の開放感が生まれた。

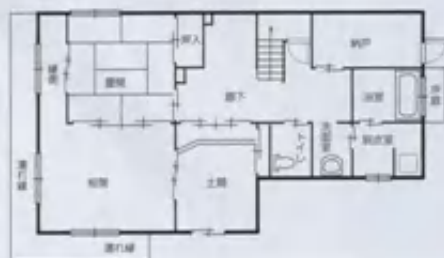


大黒柱を中心に、昔ながらの田の字構造の1階部分。

■安曇野市 高松邸
■設計・施工会社
高松建築工房



【敷地面積】
257.88㎡(78坪)
【床面積】
延床面積：165.02㎡(50坪)
1階床面積：82.21㎡(25坪)
2階床面積：82.81㎡(25坪)
【竣工年月】
平成20年4月30日
【施工会社】
高松建築工房
安曇野市：TEL.0263-82-1260
【家族構成】
高松伸幸さん(40)・同居1名・犬2匹



1F

建築士

高松 伸幸



1998年(平成10年)、穂高町(現安曇野市穂高)に事務所開設。設立当初はログハウスに特化した建築設計事務所として活動。現在は伝統的民家建築の素晴らしさを伝えるべく、ログハウスと並行して在来軸組みの家づくりを実践している。

●お問い合わせ
高松建築工房

〒399-8303 長野県安曇野市穂高 6079
TEL 0263-82-1260 FAX 0263-82-1265
E-mail mail@takamatsu-log.com
http://takamatsu-log.com



あえて2階に設けたリビングルームはからは、手前に田園風景、奥には有明山を望む。

内に入ると清々しい無垢材の匂いがして木の家の良さを実感。広い土間は吸湿効果の高いシラス(火山灰)でできた白州土タタキ。続く板座敷、畳座敷へとつながっている。家を支える太い大黒柱は四方現しの木肌がきれいな吉野ヒノキ。天板をはっていない天井は高く、構造材もすべて見えているが、大工仕事の丁寧さが光る丁寧な仕上げだ。床材、天井ともに県内産の根羽スギを使い、なるべく自然に近い形で無垢材ならではの良さを



キッチンもなじみの職人さんの手作り。



洗面ボウルはこだわりの信楽焼き。

表現している。生活空間は2階。窓辺に座って穂高の素晴らしい景色を見たらその理由がわかった。風の通り道のある設計は夏でも涼しく、時の経つのも忘れるほど気持ちがいい。リビング空間は高い勾配天井で縦横に開放的だ。柱や梁などの軸組みを見せた「真壁」造りの大胆で繊細な木の使い方は、ログハウスに強い高松さんならではのデザイン。暖房は薪ストーブ。あえて2階に設置した。普段使わない1階は局所暖房にしたが、それで良いかどうかは冬を体験して検討するという。「実験ハウスですからね」と高松さんは笑った。オリジナルの木製キッチンは、シンクの下がオープンになっていてゴミ箱も収納できてすっきりと片付き使い勝手もいい。「どこも無垢材にこだわった家です。県産材を使ったのは初めてでしたが、現地で吟味できるのが強みだと実感しました。建具はすべて木製。ログハウスでは当たり前の木製サッシも日本の民家に合う引違い窓となると予算と性能のバランスを取るのが難しかったのですが、最終的には新潟の建具組合に

依頼。障子や室内戸は地元穂高の建具職人に、カウンターやテーブルは木工作家にお願いしました。また、オリジナルの洗面台に陶器の信楽焼の洗面ボウルを使用。信楽まで出かけてオーダーしたお気に入りです。浴室の黒御影石にはクラフト作家にサンドブラストで彫刻を施してもらい、玄関ホールの飾り窓には織物作家にタペストリーを作ってもらいました。そうした室内空間の遊びの要素が我が家らしさという個性につながるという提案です」。

木の魅力と人間の手で作ったものの温かさにあふれた家は、どこにいても風と光を感じる心地よさに満たされている。地域らしさと自分らしさを融合させたコンセプトハウス。今後は家づくりから一歩進んでまちづくりをしていきたいと熱き建築家は語った。



サンドブラストで描かれた信州の山並。